

そのまま顎に、喉元に、肩にキスを落としながら胸まで下がると、ディーノは一瞬の躊躇いを見せた後、胸毛に埋もれる突起に舌を伸ばしてきた。

「んん……」

突起の表面を、ディーノの舌がチロチロと控えめになぞる。

言いかけた言葉を今聞くのは何だか無粋な気がして、オレはただ黙ってその行為を受け入れた。

オレに抵抗する気がないと分かると、ディーノは少し驚いたように目を見開く。

だがすぐに切羽詰まったような顔をして、おしやぶりつくように突起を口に含んできた。

「ンッ！」

キツく突起を吸われ、生じた小さな痛みに呻き声が漏れる。

しかしディーノはそれに気付かず、夢中で突起をしゃぶり、吸い上げていた。

何だか赤ん坊みたいだ、なんて思ってしまったせいか手が無意識に動いて、胸の上で揺れる金色の頭をそっと撫でる。

すると、オレが何を考えているか察したのか、ディーノ

の指がそれを否定するようにもう片側の突起をキュッと捻ってきた。

「グッ……んん……」

指はそのまま突起を抜くように擦り上げ、舌もセクシャル的なものを意識した動きへと変わっていく。

「ふ……っく……っ!!」

カリッと突起に歯を立てられると、痺れるような刺激に軽く背が仰け反った。

同時に、そこがどれだけ硬度を持ち始めたか突き付けられたようで、羞恥が沸き上がってくる。

恥ずかしさから逃れるように両腕で顔を覆うと、ディーノは突起から口を離し、無防備になったオレの脇腹をすうっと撫で上げた。

「ヒッ……ああ……」

片側だけでなくもう片側の脇腹の上も、同じようにディーノの手の平が滑る。

顔を見られたくなくて腕で覆い隠したまま、ひたすら身を振って擦ったさから逃れようとした。

そんなオレの脇腹や腹を、ディーノは容赦なく手の平で撫で上げ、追い詰めていく。

そして……